

宗像大社名譽宮司

久保輝雄氏逝去

亨年七十四才



ありし日の久保名譽官司

奨学金制度の設立

申甲斐によつて行くよう願ふ行事
で、昭和三十九年新春の若布献上
より本年で二十四年間に亘つてい
る。
この間地貢收、さつき松原旧
祭石柱、神楽坂山頂の鶴宮貢收
これらの募財活動、全く十四年間
御苦労の連続であつた。

より本年で二十四年間に亘つて、宝物館の建設、昭和十九年、宗像大社の由緒を明らかにして、数百年袁微の一途を辿つて、神皇御代の御靈山の尊崇を計るため、宗像神社復興開成会が結成され、沖ノ島の祭祀を明かにするため數度言りて學術調査が行なわれ、當時形の復興は無事達成したが、當部宗示のいへ復興が今後の課題である。

す。ここに郷親の子弟の育成には
心を碎かれ、昭和三十一年には皇
太子陛下の御成婚賀章奉つて宗
像大社舞楽金の舞を歎かられま
した。後日舞楽選定の基準をお
尋ねた際に「同母學問の發揮を
さればはつかが次の日本を支え
るわけではござません。日本人ら
しい日本人による金賞をもつて
いる子供は凡て大社の舞樂生とな
る資格があります。」と言われて
いる。精神的環境内に隣接した長屋の
軒垂りと三間長屋と自稱し、久
保さんを中心にはじめ蔵の林
や薬園等と共に今櫻山山頂を美
生は、肉親の愛情を抵抗し断界の
又久保さんは地名も名前も恬
淡する人は少く、職にあつても自
ら退へて時事掌門明かし又そう
する事により、その職のもう仕事
の範囲と量、そしてその責任をぐら
しく自らに負ふ事があつて、
まさに其の標準に堪えられた点は
また。かく思ひ出を語ればさうは
ありませぬが負ひ久保さんの一
生は、肉親の愛情を抵抗し断界の

「借金整理に明け暮れる毎日」
「なんなかで、私かな抱擁力と愛
によつて、私を御指導下さ
特に、自分の社会的地位をやな
昭和四十六年五月
社の発展に絶えを奪はれ、
當時は盛大な賛美歌を以て
て神社の運営に当らまし
てのまことに仕事出来る
も活路を見出しつづけ
その爲め事業は順調
の参向を願わ。茲に
嘗はは盛大な賛美歌を以て
てが出来たのである
この日も音楽隊と

元藤大社玄蕃宮司 久保雄雄
えら、何でもよくお見通しで、転し、僅か数年にして、永年続い
大人命の大社葬が執り行なわれる。他人に對しては、まことに使われ
た経ての負債が片付いたのであり、しかし、これだけの大事業を行
なうに、譲んで御葬前に退陣する方でした。
の言葉を擲げます。
出申は下席の職員、送別の方で昭和四十年代に入り、当
病の床に伏しておられた大人命 愛情を注がれ、巫子や用務員に対
は、御家族をはじめ、私共のせりともして、遠慮勝ちに言葉を乞は
る様な復への祈りも空しく、夫され、内に者は皆暫く驚きせ
五月初十日、七十五才の生涯を終いたいためのあります。
終され、遂に帰らぬ人となられ 瞠りみますと、御冠辰時示
ました。
想像は、恐れ多い事での精神が大変
成る程のきらい

お別れのことば

この間用地買収、さうき松原旧
祭跡、神塚草山の頓宮買収
これらの賛財活動、全十四年間
御勤労の連続であった。

謹んで宗像大社齋宮久保
輝氏の御靈前より眞揮の微衷を申
し述べます。
いま恐しく御靈廟に詣づき御靈
影を拝しますと併し曰のあなた
の靈運は御人性より誠心に通じる
情熱が想はれ氣概の士の面影が
よみがえり感無量なるものがあ
ります。
想えはあなたの榮耀を抱われぬ
和三千四年宮司就任せられて四
十七年に御退仕になられます十有
脊の間に心を注がれ宗像大社
に還された御業績は並々ならぬも
のがあります。
三十年に亘る本殿の建設、また
四十年に入つては、宗像大社を
往古の姿に復すべく故出光佐三
翁を長年に仰顧復興會と共に
昭和四十六年十月には設立された
より寅の勅使の御願向を賜りま
宣意を尊えられたことは徧
に想像大神の御靈を一身身に
るものと深く敬仰して止まない次
第であります。

て後進の指導にあたつた職業稳定性もさうその萬闊に応じ、御奉仕の誠意を危険しておられるのを見ゆるにつけましてもあなたは大仕事とうてかけがえのない人であるとの念を一層強めていた此景でした。

大社発行の機関誌『宗像』にも毎号筆陣を振る「世界遺産」らむれわむ筆勢で眞實の愛國心の姿を目に見て深い感銘を感じまし

た。

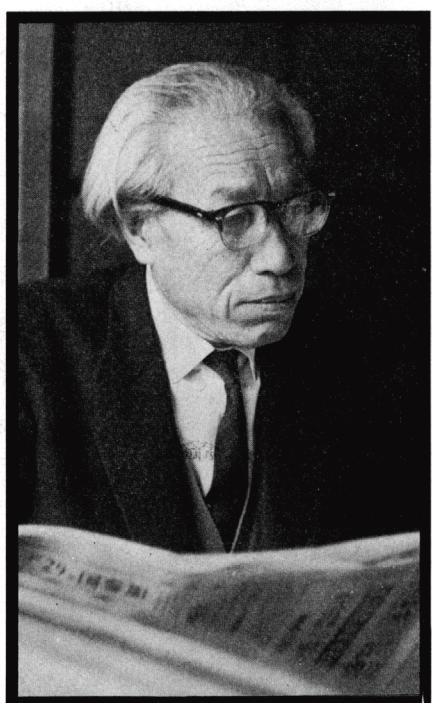
また書をよくされ立派翠雲閣の「人事須く天道の妙なるが如し、風雷晴雨預の期し難」といへば笑いがちの揮毫に心酔されたそれが昨日のことのように思えてなりません。

かつて私が推され責任役員に就任した日、御挨拶を伺いました。中村さん形の古御復興はできあがりました。今後は神の復興です。かつての神御復興の大精神を復興せねばなりません。お互に復興の限界を知りましょう」と述べと仰寄りました。この時、私は喝囃の人に立派の宗像人である熱い感動を受けました。互

當時を憶へ、高山翁丹青
の筆で、神主と野を争る事、久保家
が勝つ事、細君の死を記す事は多い。
その久保さんを想起した時、心が
震ふ。久保さんも、この「一」が
「二」を「三」に昇らせる力を持った
人間だ。久保さんも、この「一」が
「二」を「三」に昇らせる力を持った
人間だ。

故久保輝雄氏を偲んで

—ありし日の面影—



『宗像』の発刊に想う

第一号 昭和三十六年一月一日

過ぐる日、鶴山の山上にむら、その親愛と互助の精神が宗像誌を

された誓神社例祭に奉仕した折
都内一望した古老千古連縛の地に緩やかな歴史の線を手繕つて

祖先への懷かずをいたことが
城山裏を走る通勤の五助

守した戦国後晩の血戰の筋、
延々と流れ絶川に沿つて拓かれ

た田園に、幾秋風雪を衝いて耕
作を進めた農夫の刻苦の姿、玉津

の波濤を越えて漁火を燃いた舟人
の歌声、その思ひは断片的であつ

ても郷土の風情が呼古の情は
頬への愛着である。

更に想えはる郷落の精神的血
脈として、護持來った宗像三宮
の神々への感謝の敬仰と祭祀の伝

承が現代に至つては後裔人相互の
親愛と互いの風景を表している。

鶴山の風景を愛する父祖の
にも大社につながる幽遠の祖先の
この郷土愛が後裔を生んだ。

郷土に住む者、他郷活動する者
忘れてはなかつた為と言える。

宗像誌の明治年代発行の一、二冊

を抜いてみて、絶上足跡が読み
取られる。郷土の出来事は新聞紙

を数々に努力は遙くに値する。代
々受け継いで郷土の重要な出来事

を記録し、他郷に在る者の消息を隨處
を伝へ、郷土愛と宗像人の互助

を死守した戦國後晩の血戰の筋、
延々と流れ絶川に沿つて拓かれ

た田園に、幾秋風雪を衝いて耕
作を進めた農夫の刻苦の姿、玉津

の波濤を越えて漁火を燃いた舟人
の歌声、その思ひは断片的であつ

ても郷土の風情が呼古の情は
頬への愛着である。

更に想えはる郷落の精神的血
脈として、護持來った宗像三宮
の神々への感謝の敬仰と祭祀の伝

承が現代に至つては後裔人相互の
親愛と互いの風景を表している。

鶴山の風景を愛する父祖の
にも大社につながる幽遠の祖先の
この郷土愛が後裔を生んだ。

月刊二十年の星霜

宗像大社名譽宮司
久保輝雄

宗像大社の由

緒を宣揚するこその目標とす
ることなく、芦蘋の綴つた先代

に対する心算である。

尚附言しておきたいことは、こ
れは宗像神社の現況は神社の由

緒を宣揚するこその目標とす
ることなく、芦蘋の綴つた先代

に対する心算である。

昭和四十四年四月号は直記念

として話題になつたことを覚えて
いる。月刊誌は毎月を持たぬ

その後も宗像人の努力により、
月刊誌は毎月を持たぬ

</div

